

「メガ中東」と安全保障複合体

立山良司

「メガ中東」「グレート・中東」といった表現が登場してきたのは、1990年代初め、ソ連が崩壊し、イスラーム系諸共和国が独立したところからだ。中央アジア・カフカス地域は一般に「中東」と呼ばれる地域と、歴史的、文化的、宗教的なつながりをもってきたのだから、より広域的な視点で取り組むべきだといった議論である。

同時多発テロ事件と米軍のアフガニスタンに対する軍事攻撃は、安全保障研究の分野でも、「メガ中東」へのアプローチが必要なことを浮き彫りにしている。米軍はすでに中央アジアの3カ国に軍事的なプレゼンスを確立したし、「テロとの戦い」の一環としてグルジアに軍事顧問団を派遣した。米国はこれらのプレゼンスを「暫定的」としているが、「暫定的」の中味は不明だ。こうした動きはペルシャ湾から東アラブ地域の状況と密接に関係している。実際、もしイラクへの軍事攻撃が行われれば、従来の中東と中央アジア・カフカス地域を切り離して考えることは意味をなさない。

では、これほど拡大した広範な地域をどのような枠組みで我々は理解すればよいのだろうか。理論面で重要なヒントを与えてくれるのは、バリー・ブザンが提示している安全保障複合体 (security complex) の概念だ。この概念は一見、カール・ドイチュが提唱した安全保障共同体 (security community) と似ているが、内容はまったく違う。後者が西ヨーロッパをモデルに紛争解決の手段としての戦争の可能性が消滅した状態を想定しているのに対し、前者は友好／対立関係のネットワークが形成されている故に、「他の国の安全保障を考慮しないかぎり、ある国の安全保障を考えることができない国家群」と定義される。

もちろん「メガ中東」が安全保障複合体をどのように形成しているかの議論を深めるためには、より実証的な研究が必要だ。また、これだけ広大な地域をまったく単一の安全保障複合体としてのみ捉えることも弊害がある。その点でブザンはより下位レベルのサブ安全保障複合体の概念も提唱している。中東でいえば東アラブ、ペルシャ湾、中央アジアなどはサブ安全保障複合体と規定することは可能だろう。

「メガ中東」に関する安全保障研究の一つのアプローチとして、こうした階層的な安全保障複合体の存在を想定できないだろうか。かなり刺激的な研究課題だ。

(たてやま りょうじ／防衛大学校教授)